

はばたき

H A B A T A K I

Vol. 49



特集 夢を、追いつける。

-TENRI CHALLENGERS-

夢はインドネシアで起業すること。
父の母国に、事業で貢献したい。

国際学部地域文化学科 4年生
東川 菜梨亜 ナダブダップ さん (P.3)

- ONGOING PROJECTS -

天理医療大学との合併について (P.9)
天理警察署と天理大学との包括的連携 (P.10)

- INTERVIEW -

特別支援教育支援員 椿 理穂 さん (P.6)
国際審判員・保健体育科教諭 小池 邦徳 さん (P.8)

その山頂に、私は辿り着ける。

ある人は、そこに行くのは無理だよと言った。
またある人は、その目的地は無謀だよと言った。
そんな難しいルートを使わないで、
ほかの場所をめざしたら?と言った人もいる。
でも、私にはどうしても行きたい場所があった。
ほかの場所なんて、考えられなかった。

私たちの人生には、ときに困難がつきまとう。
コントロール不能で、どんなに努力しても前に進めない、
そうした厳しい局面を迎えることがある。
2020年、世界を襲った新型コロナウイルス感染症の流行は、
多くの人生を変え、学生生活にも影響を及ぼした。
目標に向かって努力し続けることを難しいと感じている人も多くいるだろう。

しかし、そうした状況のなかでも
自分自身の夢と向き合い、着実に準備を進める人たちがいる。
彼らに共通するのは、前向きな心。
誰かの喜ぶ顔が見たいと願う、貢献性。
そして山道に迷ったときに相談できる、恩師の存在だ。

天理大学では、少人数制のもとで、
教職員が各学生の夢を全力でバックアップしてきた。
その指導と絆は卒業後も続き、コロナ禍のような困難と向き合い、
夢を追い続けるためのサポートを行っている。

迂回してみよう。
恩師のアドバイスを胸に、
今は、じっとその場で力を溜めることに集中してみよう。
夜明けが訪れるのを、心待ちにしながら。
その山頂に、私は必ず辿り着ける。

自分を超えて、未来を拓く

TENRI CHALLENGERS

夢を、追い続ける。

夢はインドネシアで起業すること。

父の母国に、事業で貢献したい。



TENRI CHALLENGERS
国際学部地域文化学科
アジア・オセアニア研究コース

とがわ まりあ
東川 茉梨亜
ナダプダップさん

2018年4月入学。インドネシア人の父を持ち、高校時代よりインドネシア語の勉強に励む。2019年7月から翌年3月までパジャジャラン大学に交換留学。インドネシアで起業する夢に向けて、日々語学力を鍛えている。

「言葉の壁」というと、難しそうなものに思えますが、意外と行動力ひとつで越えられるって、気づいたんです」。

明るい笑顔で快活にそう話す、東川茉梨亜ナダプダップさん。国際学部地域文化学科4年生の東川さんは、アジア・オセアニア研究コースでインドネシア語を専攻している。東川さんがインドネシア語を学び始めたのは、高校3年生の頃だった。

「父がインドネシア人なので、もともと幼少期からインドネシアを訪れていました。祖母や従兄弟など、父方の親戚とジエスチャーでしか交流できないのがもどかしく、もっとコミュニケーションを取りたいという気持ちから独学で勉強を始めました。実はもともと、私は大学に進学するつもりではなかったんです。でも、高校の先生に『東川が大学に行かないのはもったいないと思うよ』と声をかけられて。その際にインドネシア語を学べる大学として、天理大学を勧められたんです。地元の奈良県にある大学ということもあり、興味が湧いて進学を決めました」。

「努力すれば、必ず結果につながる。 そう信じて、今でいいから」と に取り組んでいます。」



インドネシアに交換留学。
国籍や年齢もバラバラの仲間と
切磋琢磨しながら学んで。

東川さんは授業に熱心に取り組みながら、留学生の生活を日本人学生がサポートするチューター制度や、日本人学生と留学生が交流を深められる異文化交流カフェ「アイ・カフェ」でのインドネシア語レッスンも活用しながら、帰宅後も語学の勉強に励んだ。インドネシアにいる親戚に成長した姿を見せたい想いから、2019年7月から翌年3月まで姉妹校のパジャジャラン大学への交換留学を果たした。

「天理大学の交換留学プログラムが非常に充実しており、現地での学費などが無料だったため、実質生活費のみで留学できました。また先生方のサポートも充実していて、留学中にゼミの奥島美夏教授がパジャジャラン大学まで会いに来てくださったときにはすごくうれしかったです。」

留学中に東川さんがまず驚いたのは、現地の学生たちの学習意欲の高さだ。

「クラスメイトの出身国はタイ、ラオス、マレーシア、中国、韓国——年齢も上から下までバラバラでした。お子さんをお持ちの方もいれば、大学院に入るための下積みとして学んでいる方もいました。こうした多様なバックグラウンドを持つ仲間と年齢や国籍に関係なくインドネシア語で交流し、「言葉の壁」を越えて、恋愛からそれぞれの国の

事情まで、多くの話を交わしながら語学力を上達させたことは、非常に良い経験になりました。」

また、人口の9割近くを占めるイスラム教徒の文化を間近で見たことも、東川さんの視野を広げた。

「父はインドネシアでも希なキリスト教徒であり、留学に行くまではイスラム教について詳しく知りませんでした。現地でムスリムの友人たちの1日を覗き、習慣やタブーを学んだことで視野が広がりました。」

自分の世界は狭かったんだ。

満点の星空を見上げながら、

そう痛感した。

本学で優秀な成績を収め、自信を持って留学に出発したという東川さん。現地では、苦労することもあったという。

「現地の話し言葉によく出てくる略語が思うように聞き取れなくて。落ち込んで、寮にこもりがちになったこともありました。また日本と衛生状態が大きく異なるので、体調管理にも苦戦しました。それでも、外に出てみなぎyoと思って。そうしたら、地元の人声がかけてくれたり、行きつけのお店を見つけたら、少しずつ楽しいことに挑戦できるようになって。長期休暇中には、1人でバリ島に1ヶ月間滞在し、専門学校で日本語を教えたり、父の実家に2週間ほど滞在したりしました。実家がある村には電気や

2020年3月、コロナ禍の影響で東川さんは帰国を余儀なくされる。それから6月

コロナ禍でも、できることがある。
オンライン交流会などに参加し
夢への計画を練る毎日。



大学構内で販売されていた鶏肉。

「電気がないので、星空がすごく綺麗なですよ。夜眺めていると、手が届くんじやないかと思ってくらいで。このために私はここに来たんだなって思えるほどの光景でした」。

行動力や環境適応力、コミュニケーション力を身につけ、留学に行く前と後では、全く違う自分になった。そう話す東川さんは当時のことを思い出しながら、懐かしそうに語る。

シャワーがないので、井戸で水を掬い、調理場では火をおこすところから生活が始まります。ある朝は、目が覚めたら祖母に飼育中の豚を屠畜するように言われたこともあり。結局私にはできませんでしたが、周囲を見渡すと、子供たちが食卓に出すための鶏を追いかけていたり。今まで自分が生きてきた世界は狭かったんだ、と改めて感じました。

中旬までは、日本からバジャジャラン大学の授業をオンラインで受講した。友人と思うように会えない状況に落ち込み、モチベーションを保つことが難しい時期もあったというが、今だからできる勉強をしようと気持ちを切り替えた。またアジア・オセアニア研究コースで実施する、在学生とインドネシア人留学生・卒業生によるオンライン交流会など、コロナ禍で学生と海外をつなぐ試みにも積極的に参加している。

「ネイティブの方となかなか会話ができません寂しく感じていたので、こうした交流会はうれしいです。現在インドネシアには渡航できないものの、アイ・カフェなどでインドネシア人留学生と交流しています」。

そう話す東川さんには大きな夢がある。

「私の夢は、将来インドネシアで起業をすることです。経済成長の著しいインドネシアは、まさにこれからの国。バリ島で健康志向のカフェや日本語学校を経営することをめざしています。また、開発途上にある父の地元にも、何か貢献できたらと思っています。そのために、現在は『インドネシアにおけるバリ島の観光開発』をテーマに、卒業論文の執筆に励み、バリ島が日本人に人気である理由や、コロナ禍で打撃を受けた観光産業の回復可能性について考察しています。起業には資金も必要なので、まずは日本で就職してさまざまな経験を積み、40代になる前にはインドネシアに移住できたらと考えています」。

そんな東川さんのモットーは、**No Muscle, No Life**だ。

「筋肉は裏切らない、努力すれば必ず結果として現れる」という意味の言葉です。どんなに苦しくても、どんなに大変なときがあっても、やり通せば必ず結果はついてくるものです。これからも留学で身につけた力を糧に、夢に向かって邁進したいです」。



年齢や国籍、宗教など多様な背景を持つ友人と交流した時間が視野を広げた。

EDITOR'S NOTE

●国内で“海外”を体験できる試み — インドネシア語によるオンライン交流会

1925年に外国語学校として創設した天理大学は、100年に近い国際教育の実績からさまざまな国際体験の場を提供してきました。残念ながら、新型コロナウイルス感染症流行の影響により、留学や国際プログラムの実施は現在難しい状況にあります。本学ではこうした現状下でも海外にはばたく夢を持つ学生を後押しするプログラムを多数用意しています。そのひとつが、本記事中でも言及のあった国際学部地域文化学科アジア・オセアニア研究コースによる「オンライン交流会」です。

2021年5月23日に実施した本交流会では、インドネシア語を専攻中の在学生とインドネシア人留学生・卒業生、教員がZoomを使って交流しました。交流会は主にインドネシア語で進行し、卒業生から就職活動やコロナ禍でのモチベーションの保ち方などについてのアドバイスが交わされました。

こうしたOBOGとの密なネットワークや卒業後も続く教員からの丁寧なフォローは、まさに少人数制の本学ならではのものです。今後も国内にある“海外”に目を向け、「国際性」を身につけられるような新しい試みを実施していく予定です。



TENRI PIONEERS

特別支援教育支援員
(京田辺市教育委員会)

つばき りほ
椿 理穂さん

2020年3月、国際学部地域文化学科アメリカス研究コース卒業。人間学部宗教学科事務助手を経て、現在、京田辺市の草内小学校において、特別支援教育支援員を務める。在外公館派遣員をめざし、日々勉強に励む。



外国籍の児童の傍で、授業をフォローする様子。



飽きずに勉強ができるように、日々試行錯誤で取り組む。



ペルー出身の同僚とも協力しながら、業務に当たっている。

日本のなかの“海外”に寄り添う。 外交の舞台を支える日を夢見て。

「やりがいを感じるのは、やはり児童の成長を目の当たりにしたときです。担当している児童が日本語をしっかりと理解し、私がいなくても学校生活を送れるように導くことを心がけています」。

真剣な眼差しでそう語る、椿理穂さん。国際学部地域文化学科の2020年卒業生だ。椿さんは現在、京田辺市の草内小学校において、スペイン語の「特別支援教育支援員」（京田辺市教育委員会）として勤務している。どのようなお仕事なのだろうか。「主に、ボリビアから来日した外国籍の児童のサポートをしています。私は、Eくん

という、今年2月に来日したばかりの1年生を担当しています。毎日の業務としては、国語から体育までの全ての授業において、Eくんの傍で授業中の通訳やフォローを行っています。初めは私に務まるのかと不安もありましたが、元氣いっぱいの彼のおかげで、毎日とても充実した日々を過ごしています。入学したの頃は、日本語が全く話せなかったEくんでしたが、最近では私がいなくても教員の指示を理解できる場面が増えていきました。日本語も少しずつ話せるようになりました。平仮名もほとんど読めるようになりました。まだまだ道のりは遠いですが、どうすれば

飽きずに勉強できるか、インプットしやすいのか、試行錯誤しながら日々取り組んでいます」。

スペイン語での授業サポートから配布物の翻訳までを担当。

交換留学で磨いた語学力を活かして。

本学国際学部外国語学科のJ.ロペス准教授の紹介をきっかけに、現職に就いた椿さんは、スペイン語での授業サポートのほかも、学校から配布される学年だよりなどの

翻訳も担当している。

高度な語学力が必要とされる業務で活躍する椿さんの原点は、大学1年生の頃のあるエピソードだ。アルバイト先で外国人女性にスペイン語で接客した際、喜んでもらえたことがうれしく、語学の勉強に力を入れ、留学を決意するきっかけとなった。

「大学3年生の7月から、コロンビアのカリ市に位置するバジェ大学に1年間の交換留学をしました。留学中は時間にルーズなラテン文化にとまどいながらもスペイン語の勉強に熱中し、ネイティブとの交流を楽しみました。留学して何よりも気づいたことは、自分の置かれている環境のありがたさです。コロンビアには物乞いの人が多い地域もあり、道路や通りで『仕事も家もあります。子どもが3人います』と書かれたポロポロの紙を掲げて歩く人を見かけたこともあり、自分自身の今までを省みて、恵まれた環境に感謝しました。

天理大学では素晴らしい先生方をはじめとする多くの方々と出会い、私も少しずつ

成長しました。特に人から人へと、脈々と受け継がれる天理スピリットの「他者への献身」——相手を喜ばせたい一心で自ら考え行動する、という姿勢は、現職にも活かしています」。

目標は在外公館派遣員試験合格。

恩師への『恩返し』を胸に、
スペイン語の勉強に励む。

そんな椿さんは、現在、海外の日本公館で2年間勤務する「在外公館派遣員」をめざし、勉強に励んでいる。その夢を支えるのは、『恩返し』の想いだ。

「国際学部では、各先生からほとんどマンツーマンの指導を受け、スペイン語検定前にも多大なサポートをいただきました。

私は卒業後の一時期、悩みを感じ体調を崩したこともあったのですが、その際にそうした恵まれた大学時代を思い出しながら『自分は今何をしているのだろうか?』と反省して。

「相手を喜ばせたい一心で、自ら考え行動する。そうした姿勢を大切にしています」。



時間をかけて自分と向き合うなかで、在外公館派遣員として周囲に貢献することでお世話になった両親や先生に「恩返し」がしたいと考えるようになりました。先生方からも激励の言葉をいただき、人間学部宗教学科の事務助手として勤務させていただきながら勉強に励み、2020年秋に一度目の在外公館派遣員試験に挑戦しました。残念ながら不合格となりましたが、試験後から約半年間、アメリカス研究コーズの山田政信教授が新聞記事の翻訳添削を毎日してくださいました。山田教授とは今でも頻りに連絡を取り合い、ご指導をいただいています。卒業後もここまで親身なサポートをいただけるのは、本当に天理大学ならではの感覚です」。

特別支援教育支援員としての業務に励みながら、試験合格に向けてスペイン語の勉強に取り組む椿さん。その原動力は、「感謝の心」だと話す。

「今までお世話になった先生方への感謝の心が私の原動力になっています。まずは在外公館派遣員試験に合格し、2年間海外で経験を積み、スペイン語に磨きをかけたいと思っています。負けず嫌いな性格なので、絶対に諦めたくないんです。コロナ禍で辛い思いをしている在学生もいるかと思いますが、今だからこそできることに目を向けて、夢を貪欲に追いかけてみてください。毎日元気に部活をしたり、勉強したりできることに感謝しながら、充実した大学生活を送れるように願っています」。

EDITOR'S NOTE

●「他者への献身」を外交の世界で — 外交官養成プロジェクト

本学で身につけた「他者への献身」の精神を活かしながら、教育現場で活躍する椿さん。彼女がめざす「外務省在外公館派遣員」は、海外の日本公館で2年間の任期で勤務し、公館事務をサポートする職業です。本学では、1989年から現在まで合計52名の派遣員を継続して輩出してきました。華やかなイメージのある外交の世界ですが、在外公館派遣員をはじめとした「下支え」の仕事の担う人の存在があってこそ。そこで生きてくるのが、本学の「貢献性」です。こうした背景のもと、本学では2025年の創立100周年に向けた「天理大学ビジョン2025」の一環として2018年末から「外交官養成プロジェクト」を実施しています。試験と面接を経て選抜された学生は、1年生から3年生にかけてハイレベルな語学力と国際的に通用する教養を身につけるための「外交官養成セミナー」を受講し、原則として4年生の春に外務省専門職員採用試験に挑むことになります。1925年に外国語学校として開校した伝統を持つ本学。実践的な語学教育で、世界に貢献できる次世代の国際人を輩出するのがこのプロジェクトのねらいです。



どんなときも、公正公平に。 国際審判員として、東京五輪に参加。



TENRI PIONEERS

国際審判員
保健体育科教諭こいけ くにのり
小池 邦徳さん

1999年3月、体育学部体育学科スポーツ学コース卒業。天理教校学園高等学校で保健体育科教諭として勤務し、同校レスリング部部长、天理大学レスリング部監督を務める。「国際審判員1S級」として活躍中。

恩師の言葉に背中を押されて。

レスリングの国際審判員として
世界で活躍中。

「座右の銘は、『忍耐・努力・感謝』です。天理レスリングの理念であるこの言葉は、人を指導する立場になった今、より胸に響くものがあります」。

真っ直ぐに前を見据えてそう話す、小池邦徳さん。体育学部体育学科の1999年卒業生だ。天理教校学園高等学校の保健体育科教諭である小池さんは、本学レスリング部の監督も務めている。そんな小池さんには、もうひとつの職業がある。それは、レスリングの国際審判員だ。本学在学中に西日本選手権で上位入賞を果たすなど、第一線で活躍する選手だった小池さんは、現役引退後に26歳で国際審判員となった。現在、最高ランクの「1S級」審判員として活躍する小池さんは、どのようなきっかけで、審判員への道に進んだのだろうか。

「高校時代の恩師である、岡田法夫さん

の助言がきっかけです。岡田さんは、天理教校学園高等学校のレスリング部創設者で、コロンビアナショナルチームの監督も務めていた方です。選手から審判員への転向にとまどいもありましたが、「若いうちに審判員としての経験を積み、将来は五輪を狙いなさい」という岡田さんの言葉に背中を押され、今に至ります」。

体当たりで磨いた語学力と

コミュニケーション力

天理大学の国際的環境が糧に。

恩師の助言通り、着々と国際経験を積んだ小池さんは、2021年7月開催の東京五輪に審判員として選出された。内定後は、喜びと感謝の気持ちを、ハワイ在住の恩師に電話ですぐに伝えたそう。小池さんはこれまでも、2019年に世界選手権で優秀審判に授与される「ゴールデンホイスル賞」を受賞し、2020年には国際審判員を指導する「エデュケーター」として日本人で唯一選ばれるなど、高い評価を受けてきた。活躍の秘訣は、語学力と積極的なコミュニケーションへの姿勢だ。「岡田さんから『世界に通用するためには英語が重要だ』と教わって。そのアドバイスを胸に、天理大学のイブニングカレッジに通うなどして勉強に励みました。もともと英語は得意ではありませんでしたが、レフリー仲間との交流を通じて語学力を伸ばしました。特に、2017年に英国「マンチェスター」で開催されたエデュケーター養成クリニックで、英語でのプレゼンテーションに体当たりで挑んだことは良い思い出です。今思えば、大学1年生の頃から、国際学部の学生に混ざって海外布教を志すSATOMにも参加していたんですね。天理大学の国際的な環境で培った力が、今の素地になっているように感じます」。

夢は天理レスリングを広め、
地域社会に貢献すること。
五輪にも平常心で挑みたい。

小池さんの夢は、天理スポーツの一翼を担うレスリングを広めることだそうです。

「世界で活躍する選手やメダリストを天理に呼んだり、地域の子どもたちにレスリングを体験してもらうような試みを通じて、地域社会に貢献し、レスリングで世界をつなげたいと考えています。また、若い人にレフリーの仕事が楽しいものだと思えていくことにも力を入れていますね。僕個人としても、審判員として更なるスキルアップをめざし引き続き公正公平・厳正厳格なレフリーングを行います」。

東京五輪においても、平常心で挑みたい——そう力強く話す小池さんは、後輩たちへのメッセージをこんな風に語る。

「コロナ禍で大変だと思いますが、日々目標を立てて努力することが大切です。勉強って、教室だけするものじゃないと僕は思っています。新しい環境に飛び込んで、学び、成長につなげてほしいと思います」。



新たな分野で 社会に貢献するために。

2023年、天理大学は天理医療大学との合併により、
医療学部(仮称)の設置を構想しています。

本合併は、「建学の精神にもとづく教育領域の拡大」をその目的としています。
天理大学創立100周年に向けたビジョン推進の一環として、より幅広い分野において
社会に貢献できる人材の養成をめざし、教育の学問領域を拡大します。

Q なぜ今、合併を行うのでしょうか。

A 社会的価値観の多様化が進むなかで、新型コロナウイルス感染症の流行という未曾有の事態により、私たちの生き方は大きな変化を余儀なくされています。このような転換期において、利他的な感性や多様性をしっかりと理解できる素養を持ちながら、新しい視野を創造できる力により、コロナ禍の地域社会に貢献できる医療人がますます求められています。

こうした社会の要請に応えるべく、天理大学は天理医療大学と合併します。同じ宗教的基盤を持つ両大学がそれぞれの研究分野で連携し学修の幅を広げること、地域社会において積極的に貢献できる人材の育成をめざします。

Q どのような医療人を養成しますか。

A 私たちがめざすのは、「宗教性」・「国際性」・「貢献性」という建学の精神の柱をもとに、人に尽くすことを自らの喜びとしながら、新しい視野を創造し、地域社会に貢献できる医療人の養成です。

合併により、単科大学であった天理医療大学では実現が難しかった教養教育の充実はもちろん、課外活動やボランティア活動などのキャンパスライフが充実することで、卒業後に医療従事者として必要な広い視野や人間性を養うことが可能となります。また、本学が伝統のなかで培ってきたグローバルな視点からの教育を通じ、その活躍の場は世界に広がる可能性もあります。

Q 学生にはどのようなメリットがありますか。

A 他分野をクロスする「プラスの学び」の実現が、学生の視野を広げます。既存学部とのコラボレーションにより、人間学部であれば臨床心理学×医療、文学部であれば言語学×医療など、学びに新たな可能性が生まれます。医療学部の学生にとっては、人文学系の知識や幅広い教養の修得、他分野の知見による新しい気づきを得る機会となるほか、既存学部の学生にとっても、例えば、国際学部で僻地医療の国際比較に関する論文を執筆するなどテーマの幅が広がります。そのほかにも、医療学部の「衛生」に関する授業の受講が、コロナ禍において有益な知識を得る機会になることも期待できます。

合併により拡大が期待される教育領域

05

スポーツ医学的側面を強化

体育学部の伝統に、天理医療大学が培ってきた検査技術や生理学知識を加えることで、スポーツ医学的側面からのサポート体制の強化を実施します。

04

現場復帰に必要な「学びの場」を提供

看護職を離れた方の現場復帰に必要なリカレント教育の場を提供し、深刻な人手不足が叫ばれるコロナ禍の医療現場に貢献します。

01

学部をクロスした学び・研究活動の可能性

既存学部とのコラボレーションにより、臨床心理学×医療、言語学×医療など、各分野をクロスした研究活動に新たな可能性が生まれます。

02

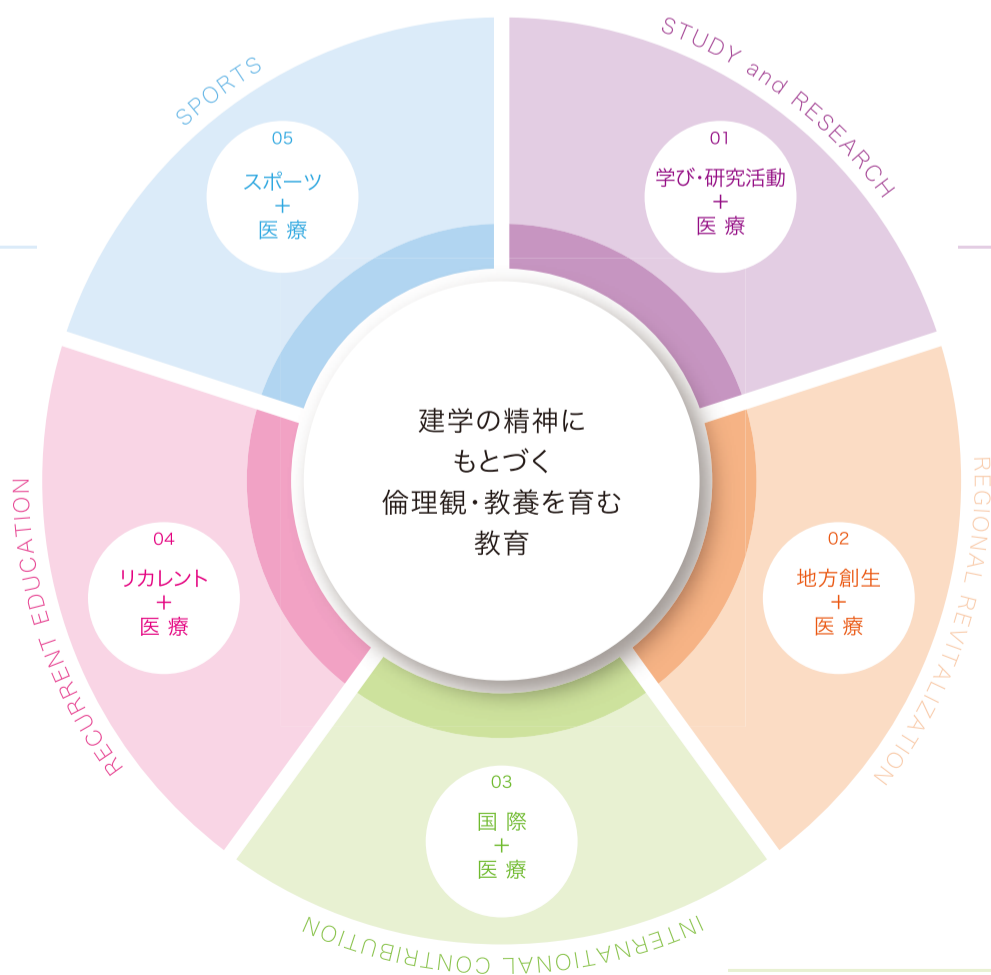
「地域貢献」の視点を持つ人材を養成

地元の天理市をはじめとする行政との地域連携プロジェクトが盛んな天理大学において、「地方創生」や「地域貢献」の視点を持つ医療従事者を養成します。

03

国内外の現場で活躍する人材を養成

留学や国際交流を通じて獲得した国際性をもとに、国内外の医療現場において語学力や高いコミュニケーション力で貢献する医療従事者を養成します。



地域の“安全・安心”に貢献するために。 天理警察署との包括的連携を締結。

2021年7月2日、天理大学は天理警察署と「奈良県天理警察署と天理大学との包括的連携に関する協定」を締結しました。
相互協力・連携により、安全・安心なまちづくりに貢献します。



調印式の様子（左より、小畑浩康 天理警察署署長、永尾教昭 本学学長）。



報道陣の質問に答える防犯パトローズ隊長の永原佑莉さん。

締結の目的とその背景

本協定は「ボランティア活動を通じた安全・安心なまちづくり」と「地域に貢献できる人材育成」をその目的としています。締結のきっかけとなったのは、本学のボランティアサークル「天理大学防犯パトローズ隊」の存在です。防犯パトローズ隊は、2010年の結成以来、地域社会との共生と社会貢献、若い世代の防犯意識の向上をめざし地道な活動を続けてきました（※詳細はP11参照）。2021年7月2日、天理警察署における調印式において、永尾教昭学長はこれまでの活動を建学の精神を具現化する行動として改めて評価したうえで、「天理警察署と本学との相互協力・連携を押し進めることで、地域に貢献できる人材を育成し、地域の安全・安心に寄与したい」と、本協定への抱負を語りました。本協定の締結により、今後天理警察署と天理大学双方の資源を活かした連携強化と地域貢献が期待されます。

COMMENT

キャリアの視点から見る“協定の意義”

新型コロナウイルス感染症流行の影響もあり、公務員をめざす学生は増加傾向にあります。本学には警察官を志す学生も多く、『大学ランキング2021』（朝日新聞社出版）掲載の「2020年警察官実就職率」では、近畿圏内で第3位を記録しています。こうした現状において、本協定はキャリアの視点から見ても力強い存在になると考えます。年間を通じた「警察官魅力発見セミナー」（第1回目：8月3日）の開講など、奈良県警察本部や天理警察署の協力のもとで、警察官志望の学生を後押しするさまざまな試みを計画しています。



まつば みちお
キャリア支援部 松葉 道夫 部長

今後の具体的展望

1 指導力の養成

警察官をめざす本学の学生が地元の小学校で交通ルールを教える活動などを通じ、将来に役立つ指導力を養成します。



2 ボランティアの推進

防犯パトローズ隊を中心としながら、本学学生の防犯・交通安全ボランティアへの参加を推進し、地域社会に貢献します。



3 広報啓発活動

「特殊詐欺防止啓発ポスター」や「自転車盗難被害防止啓発動画」※の制作など、学生主体の広報啓発活動を推進します。



※ポスターと動画についてはP11参照。

4 人材の育成

警察官志望の学生に専門的知識・技術を身につけてもらうための研修を実施するなど、地域に貢献できる人材を育成します。



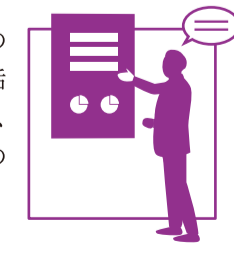
5 キャリア支援

年間を通じた「警察官魅力発見セミナー」の開講など、警察官志望の学生をさまざまな形でサポートします。



6 専門知識の提供

各種研修会への教職員の登壇や国際学部の知見を活かした通訳・翻訳の協力など、本学が保有する専門知識の提供を行います。



PICK UP

防犯パトローズ隊

「他者への献身」を指針に。 防犯パトローズ隊の11年間。

今年で結成11年目を迎える、本学のボランティアサークル「防犯パトローズ隊」。
協定締結のきっかけとなった、その活動に迫ります。



△本学ラグビー部員が一日署長に就任し特殊詐欺被害防止の啓発活動を実施（2020年10月13日）。

△防犯パトローズ隊発足式の様子（2010年10月14日）。

PICK UP

地域と大学・警察署をつないだ、地道な活動。

2010年10月14日に結成された防犯パトローズ隊は、地域社会との共生と社会貢献、若い世代の防犯意識の向上をめざし、天理警察署の生活安全課や交通課と連携し、自転車・単車の盗難防止や特殊詐欺被害防止の啓発活動を行ってきました。結成10年の節目を迎えた2020年には、同年秋の全国地域安全運動において特殊詐欺被害防止活動に参加し、ラグビー部出演の「特殊詐欺防止啓発ポスター」の掲示などを通じ、被害件数の抑止に大きく貢献。「管内の防犯は、防犯パトローズ隊抜きでは語れない」——小畑浩康署長もそう高く評価する活動が、協定締結のきっかけとなりました。

PICK UP

6月9日には、 天理警察署から感謝状も。

6月9日、防犯パトローズ隊は天理警察署より表彰を受けました。この表彰は、同隊が昨年本学のキャンパス内や街頭での自転車盗難被害防止に向けた啓発活動を実施し、天理警察署管内における盗難件数を前年度比で約52%減少させた点が評価されたものです。また、コロナ禍においてもデジタル技術を活かした啓発活動を模索し、啓発キャラクター「ロックマン」が登場する「自転車盗難被害防止啓発動画」※を作成。天理防犯協議会・天理交通対策協議会会長を務める並河健天理市長にキャラクターの声の出演を依頼するなどの工夫で、防犯意識の向上に貢献しました。

※啓発動画は、天理大学公式YouTubeチャンネルにて公開中です。▷



△感謝状贈呈式の様子（2021年6月9日）。

自転車盗難被害防止啓発動画より。▷



人間学部 人間関係学科
臨床心理専攻3年生
ながはら ゆり
永原 佑莉さん

私は防犯パトローズ隊で、隊長を務めています。防犯パトローズ隊を知ったのは、大学1年生のときです。非行少年をサポートするボランティアにて防犯パトローズ隊員と出合い活動内容を聞いたことで、私も地域に貢献したいと考え参加を決めました。

防犯パトローズ隊は、これまで天理警察署と連携しながら、さまざまな活動を行ってきました。現在、天理大学公式YouTubeチャンネルで公開中の「自転車盗難被害防止啓発動画」は約1年をかけて制作し、多くの方のアイデアや協力を形にすることができました。こうした活動を通じ、地域の安全に微力ながら貢献できることが非常にうれしいです。また報道などでも取り上げられたことで、地域の方から「応援しているよ」と声をかけていただけることに大きなやりがいを感じています。天理警察署の皆さんや大学の理解とサポートに感謝しながら、地域社会を犯罪被害から守れるように、今後も引き締めて活動に取り組みたいです。

INTERVIEW

地域貢献ができて
嬉しいです。

News Topics



天理大学硬式野球部、3季ぶり20回目の春季リーグ優勝

野球部は、2021年度阪神大学野球春季リーグ戦優勝決定戦で、甲南大学に2対0で勝利し、3季ぶり20回目の優勝を果たした。

最優秀選手賞に選ばれたプロ注目左腕の井奥勘太選手(体育4、立正大学浜南)は、8試合に登板し勝利数は6勝。47回2/3を投げて自責点は1。防御率は0.19と大活躍した。



天理医療大学との合併を発表

学校法人天理大学と学校法人天理よろづ相談所学園は、3月30日に「法人合併基本合意書調印式」を行い、令和5年4月1日を目途に天理医療大学の医療学部を天理大学に学部譲渡する形で統合する旨を発表した。

5月27日には、天理大学の永尾教昭学長、天理医療大学の吉田修学長が揃って、報道各社に対して記者説明会を開き、合併の目的・意義や今後の展望に関する説明を行った。

※認可申請等に向けて、現在、文部科学省と相談、協議を行っています。



天理警察署と包括的連携に関する協定締結

7月2日、「奈良県天理警察署と天理大学との包括的連携に関する協定」の調印式が行われた。

調印式では、永尾学長が「本協定は『ボランティア活動を通じた安全安心なまちづくり』と『地域に貢献できる人材育成』を主眼としている」と説明。小畑署長は、「天理大学で貢献性を身につけた学生たちの正義感や若い視点、発想力や行動力は街の安心安全に欠かせないもの」と、協定に対する期待を述べた。



東京五輪ホッケー日本代表に在学学生、卒業生18人が選出

ホッケー男子日本代表チーム「サムライジャパン」と女子日本代表チーム「さくらジャパン」の内定選手団発表が6月7日に行われ、天理大学の在学学生、卒業生、18人が代表メンバー、スタッフとして選出された。

男子ホッケーは、1968年のメキシコ五輪以来、53年ぶりの出場。男子ホッケーのコーチを務める天理大の穴井善博監督は、「決勝リーグ進出を目指し全力を尽くしたい」と、意気込みを語った。



天理大学 まほろば募金

—— 人材育成へのご協力のお願い ——

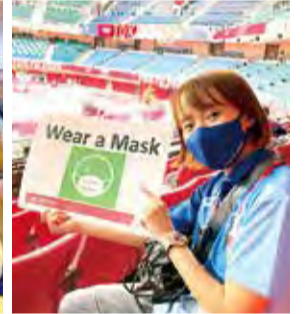
新たな時代の要請に的確に応える大学を目指し、「宗教性」「国際性」「貢献性」を身につけた人材を養成しています。

- 募金の種類：奨学金事業推進、グローバル化推進、創立100周年事業推進、施設設備整備推進、課外活動推進
- 寄付金に関するお問い合わせ：天理大学 学長室企画課 TEL:0743-63-9012

2020年東京オリンピックにボランティアとして参加



通訳ボランティアとして21名が参加。



2021年7月23日から開催された2020年東京オリンピック競技大会において、本学の学生と大学院生21名(英米語専攻19名、日本研究コース1名、大学院体育学研究科1名)がボランティアとして参加しました。参加学生が担当したのは、主に競技会場のひとつである日本武道館における、会場案内や関係者への接遇、渉外活動やウォーミングアップエリアにおける英語アナウンスなどです。本学で身につけた高い語学力やコミュニケーション力

を活かし、各国から訪れる選手やコーチ、審判員をはじめとする関係者への対応を英語で行いました。参加した学生からは、「コロナ禍の緊張感を少しでも和らげられるように笑顔での対応を心がけた。少しでも開催を支える力になれたらうれしい」「英語を使い、裏方から選手を支えることに大きなやりがいを感じた」などの声が聞かれました。本学の「貢献性」を発揮し、スポーツを「支える人」として、国際的な大舞台の開催に貢献しました。

新任教員紹介

①所属 ②職名 ③現在の専門分野



タケムラ カゲキ
竹村 景生

- ①総合教育研究センター教職課程
- ②教授
- ③ホリスティック教育、ESD、数学教育、教育ツーリズム



チェン イクビン
陳 毓敏

- ①外国語学科
- ②准教授
- ③第二言語習得、日本語教育、反転授業の実践研究



ナガハタ サオリ
永畑 紗織

- ①地域文化学科
- ②講師
- ③ドイツ文学



イ スンヨン
李 承娟

- ①外国語学科
- ②特任講師
- ③韓国・朝鮮語学、韓国・朝鮮語教育

研究室探訪

他人ごとではなく、「我がこと」にする。
障害者福祉の現場におけるメンタルヘルスを研究。

障害者福祉の現場で働く職員の方のメンタルヘルスについて研究しています。メンタルヘルスの不調による職員の休職や離職をどのように防ぐことができるかを検討し、実態調査や国への提言を行っています。私には知的障害の弟がおり、そのことをきっかけに大学で障害者福祉を学ぶようになりました。卒業論文のテーマに「障害者福祉現場における職員のメンタルヘルス」を設定し、指導教官とともに障害者福祉現場でのフィールドワークを行ったことが現在の研究の始まりでした。

私が大切にしているのは、「他人ごとではなく、我がことにする」という言葉です。障害者福祉で出会う人たちも「障害のある人にとってより良い社会は、全ての人にとってより良い社会になる」と語っています。マイノリティとされる人に寄り添うことは決して「かわいそう」だからではなく、自分自身とつながっている問題を「我がこと」にするためにあるのだと考えながら、今日も研究・教育活動に向かっています。



人間学部人間関係学科社会福祉専攻

フカヤ ヒロカズ
講師 深谷 弘和